

孤立する若者を中心としたネットワークの「効果」と「限界性」から

自殺対策を考える

渡辺ゆりか

一般社団法人草の根ささえあいプロジェクト代表理事
名古屋市子ども・若者総合相談センター 統括責任者

◆一般社団法人草の根ささえあいプロジェクトとは？

一般社団法人草の根ささえあいプロジェクトは、地域で孤立する人たちを、「ほおっておけない…」
「人ごとではない…」と感じ集まったメンバーで2011年に発足しました。制度のサポートや人の優し
さから遠ざけられ、孤立している人たちの元にかける、アウトリーチ型・伴走型のボランティア活動か
らスタートし、現在は53名の仲間（職員）と、『誰もがありのままを認められる暮らしの中で、ひとり
ひとりの小さな一歩を大切にしあえるやさしい社会にしたい』を理念に活動しています。

2013年からは、子ども・若者育成支援推進法に基づく「名古屋市子ども・若者総合相談センター」の
委託を名古屋市から受け、若者支援を軸足に活動を広げてきました。

◆子ども若者を取り巻く社会情勢の変化

名古屋市子ども・若者総合相談センターを開所してから11年が経過しましたが、若者を取り巻く
社会の状況は、年々過酷になっていると感じます。長引く日本経済の低迷や雇用形態の変化、家族機能
の低下など大きな社会情勢の変化の中で、「人並み以上に頑張っても、生活が苦しい」「普通を目指して
必死に努力するけれど、叶わない」といった、自分の境遇や未来に対して不安を抱え、憤りを表出する
若者が目立ちます。加えて新型コロナウイルスの流行に伴い、人とのつながりや助け合いの機会が狭め
られた中で、特に学生から社会にデビューする年齢（10代後半～20代前半位）を迎えた若者が孤立の
穴に陥っていき、心と身体を壊していく姿を身近で沢山見てきました。

◆「専門性より関係性」を合い言葉に、オーダーメイド型／ネットワーク型の支援を実施

私たちはこれらの若者に、「専門性より関係性」を合い言葉にして、彼ら彼女らを福祉や医療、制度に
当てはめるのではなく、一人ひとりの「在りたい姿」を一緒に描き伴走しています。しかし、人生の先
が長く、経験や成長による可変性の高い若者の支援は、わたしたちのような専門職のサポートのみでは
到底及びません。そのため、徹底して伴走型の個別支援をする一方で、わたしたちは地域に積極的に足
を運び、多様な立場の人たちを巻き込んできました。たった一人の若者のために、その若者を優しくと
りかこむ、＜オーダーメイドのチームをつくる営み＞を繰り返していく中で、困難を抱える若者たちを
理解し、彼らの人生に関心を寄せ、ひと肌脱いでくれる手応えのある人たちとのつながりは年々厚みを
増し、今では300人を越えるボランティア（よりそいサポーター）や、700件を越える協力社会資源の
方々と、絆の強いネットワークを構築しています。未だに毎日「若者のためにここまで心をくだき、力
をつくしてくださる方が地域にいらっしゃるなんて・・・」と胸を打たれるエピソードが途絶えません。
そのような地域の優しいつながりは、若者自身の人生の可能性を柔らかく広げていくだけでなく、わた
したち支援者もエンパワメントしていきます。

◆コロナ禍における家族関係の悩み

しかし、わたしたちがどれだけ思いを込めて手厚く伴走支援をしても、困難を抱えた若者を中心に編んできた優しいネットワークを駆使したとしても、立ちゆかない問題があります。その課題は、新型コロナウイルスの流行後、ますます顕著になってきました。それが「家族問題」です。

コロナ禍わたしたちは、生活リズムの変化や経済の不安など、大きなストレスに晒されました。そのストレスは、ステイホームにより距離感が狭まった家庭にダイレクトに持ち込まれ、家族間に様々なトラブルを起こしました。子ども・若者総合相談センターが月曜日～土曜日まで毎日運営するライン相談でも、「家族の悩み」が主訴のトップになりました。なんとかギリギリ距離を保っていた家族が、顔を合わせるタイミングが増えたことで一触即発状態から暴力に発展することも度々起こりました。また子どもを適切に養育する機能が低い家庭はますます機能不全に陥り、耐えかねて家を出て一人暮らしをはじめた若者が急増しました。それら若者の一人暮らしのために、住まいを探す日々は今も続いています。

家族が破綻しているのであれば、その「家族機能」をわたしたちのネットワークで優しく補完すればいい・・・最初はそう思っていました。しかし、10代後半の多感な若者は、わたしたちがいくら一生懸命、愛情を込めて家族のように接したとしても、決して満たされることがないことがわかってきました。

◆生きることをやめる若者たちの背景にあるもの

心から欲している「家族からの愛情」がうけられない若者の苦しみは、はかり知れません。孤独の中で過酷に生きる若者たち・・・その中には、わたしたちが救うことができなかった若者たちがいます。わたしたちのもとから旅立っていった若者たちには、明確な共通点があります。

- ・20代前半であること（20歳～24歳）
- ・幼少期に親から虐待を受けていること（身体的／精神的／性的／経済的）
- ・親とのトラブルや激しい確執から、家を出てひとり暮らしをしていること
- ・友人との関係を切ってしまい、関わりのある他者は支援者や医療者のみであること
- ・学生期間が終了し、一般的には働く年齢や立場にあること
- ・しかし、働くことが上手いかず（怖く）、無職か短期離職を繰り返す状態にあること

わたしたちは、若者をなくすたびに、虐待がもたらす子どもへの影響の強さを思い知らされます。20代半ばを越えて生きのびてくれた若者には、「家族の代替え機能」である、わたしたちのサポートや地域の応援が届くことが多いです。家族には及ばなくとも、他者が自分に向ける関心や優しさを、「生きる糧」にして歩みはじめることができます。しかし、10代後半の若者がそのように受け取れることは少なく、救われない気持ちのまま、20代前半の「学生から社会人」のターニングポイントを迎え、ひとりになったことが引き金になり、自ら命を絶つことを考える若者が後をたちません。私たちは、そんな彼ら彼女らをこの世界に引き留める＜秘策＞を未だ、持てないでいます。

◆これからわたしたちにできることは何だろう？

今回学会でお話しする機会を頂き、わたしたちがこれから何をすべきなのか？何が出来るのか？をみなさんと考えたいと思います。若者支援を通して、わたしたちは「孤立がいかに、人の生きる力を蝕むか」を見てきました。一方で、人の優しさを受け取った若者が、わたしたちの想像を越えてたくましく回復する姿も見てきました。生きて行くことを支える「大切な記憶」になるような、温かい出来事があちこちで起こる地域を、一刻も早くつくっていかなければ。日々そのように思いながら、仲間と試行錯誤をくりかえしています。